

句文集

砂漠の河

黒田 不知火

句文集

「砂漠の河」

目次

処女作	………	4
故郷訪問	………	4
日伯毎日新聞柳壇抄	………	4
八〇才の母へ	………	11
日伯柳壇一千回記念祝賀会	………	12
母の死	………	14
日本移民七〇年祭	………	19
パウリスタ新聞柳壇抄	………	20
魂の故郷	………	35
本能の湖	………	37
果実の微笑	………	38
新生吟社月報	………	47
噴煙抄	………	62
噴煙 一ページ句集	………	69
能因抄	………	71
「ぶらじる川柳」誌	………	74
全伯川柳大会句	………	81
新生吟社二百回記念入賞句	………	83
「コロニア誌文学 コロニア詩歌」	………	84
「白い砂丘」第八回武本文学賞入賞作品	………	87

川柳初期の頃	89
恩師を語る	91
家兄の教訓	96
コレラ騒ぎ	99
温泉旅情	101
北伯旅情	104
日本旅情	108
バラマンサ植民地時代の思い出	111
開墾地の出来事	118
続・開墾地の出来事	120
馬	122
二葉あき子と対話の喜び	124
犬と猫と鶏	126
悪夢に憑かれた戦後の混乱	129
あとがき	131

処女作

一九四四年一月

責任のなすり合いする不焼山

故郷訪問 一九八六年十月

雁は想いを遂げて悔いのない余生

日伯毎日新聞 柳壇抄

勝ち負けを命に賭けて論じ合い

勝敗の鍵を無くして開かぬ扉

勝った夢時の足音避けて住み

頑固親父故郷の便りへ知らぬ顔

不合理をただ権幕で押し通し

異端者とされてる方が正しくて

知っていることも都合で話されず

文明の世に迷信の旗を立て

強情で渡る世間は鬼となり

添うに添われずあの世へ旅立ちぬ

狂い咲く花に涙の過去があり

ふるさとと変わらぬものは月ばかり

不知火の夢にも灯りわが故郷

望郷の歌は遥かな地平線

灼熱の太陽と組む野の詩魂

生と死を越えて真っ赤な恋心

わが前に眼中にない娘と意中の娘

華あるを信じ神秘の扉を開く

花の香の積りし想い年を越し

朝という白紙へ朝寝という汚点

本心に目隠し保身の草鞍履く

柔らかい舌にもあつた毒の針

この線は引けぬ心の防波堤

水平な水の心が是となる日

物の芽が春をかついで詩を探す

露の世に信念だけが勝ち誇り

ゆかりなき勲章われ等詩を飾る

旧套が脱げず時世を馬鹿にする

要領がよいと言われて食うて寝て

百姓の特権天を恨めとて

狂人の特権太陽と対話する

問題は金を払ってケリがつき

大いなる愛に目覚める母となり

人間が擬装を解いた棺の中

先生の遅刻は黙認して平和

誠なき人の言葉と贗札と

受け継いだ貧乏神という遺産

待つという宝を捨てて先走り

キリストも釈迦も要らねど、金が要り

効き過ぎた雨乞い晴らす術はなく

呪われたセツカを呪う雨が降り

水飢饉誇る大都の恥部が見え

貧者の特権航空事故を笑い合い

平坦に見えてる道にある蹉跌

闇に生きる女は闇に葬られ

紐つきのパンへ弱者の空虚な眼

重ねゆく馬齢へ殻はまだ脱げず

邪魔にした石にヒントを与えられ

誘う眸の媚態へ揺るがぬ心の灯

大国の富月姫に吸い取られ

水爆が肩を張り合う平和維持

平和守る武器とは甘っちょろい言葉

かけ替えのない国宝は原子弾

貯蔵庫の核は戦機を待っている

王者の夢の騎りの果てのきのこ雲

片意地は通らず火蛾の焼け落ちる

救いなき心の襞へぶつ神話

角材と瓦礫に救いなき知性

永遠に朽ちぬ心の碑を刻む

ミニサイヤ君の眼僕の眼美を探る

雲に乗る夢あり運は築くもの

野心捨て落葉詩心にふれて鳴り

月に着くニュースへ貧しい灯を守り

月異変処女のカケラを持ち帰り

こぼれ種抱いて芽ぐんだ春の土

日めくりに取り残されたわが理想

しらじらと嘘が生きてる都の灯

救いなき生命、保険にかけておく

落ちついて見れば死ぬよりましな生

原点に還れぬ骨がまだ残り

虹の故郷へ届かぬ自慰の花を折る

幾千里旅路の果てに抱く故郷

涯知れぬ旅路にうるむ故郷の灯

天に届かぬ夢郷愁の五〇年

幻の凱歌へ人智の粹をかけ

凍てついた仮面自嘲の唄となり

火の鳥を飼ってる胸の花飾り

紅炎ゆる夕陽絶唱の詩を胸に

断絶のはかない影を追っている

バラ色の過去よ不自由な義齒憎む

ガラクタを捨てるわが家の歴史消え

八〇才の母へ

甘酸を舐めつくし八十路の坂登る

百までの理想は無理でも生き給え

饒舌の風が不倫の顔のぞく

不燃焼の愛木枯らしがもてあそぶ

思春期の顔明暗の海泳ぐ

涙腺の切れる歌ありまことの詩

掘り起こす過去が美醜の綾となり

誰にも気付かれない真面目人間の悪事

慰籍料で片付く不思議な不思議な世

黒白をつけずに風が吹き抜ける

口笛が佳境になると義歯が浮き

批判の矢折れ長髪の世となりぬ

「日伯柳増一千回記念祝賀会」

大いなる日に美しき過去語る

師弟愛生きて祝って祝われて

苦難越えた師の眉宇に闘魂溢れる

総領事夫人のお酌に座が和み

春風秋雨に耐えた師弟と日毎紙

日に月に磨け未来へつづく詩

思い出のつきぬ祝賀の虹消えず

一千回波とうとうとやなぎ岸

二千回は無理か一千五百回を待つ

踊りの輪はみ出て孤独の道をゆく

阿呆の如く死ぬ歩へ王将の安泰

夢を学んだ雲難行の山野越え

文明は哀し事故死の記録伸び

猫額大の芝生都塵の捨てどころ

栄養過剰死貧しき灯にも幸はあり

地球の老化へ強壯剤のない悩み

灼きついて離れぬ影にうるむ胸

かえらない思慕を夕陽が染めてゆく

春の野に詩情彩る紅椿（抜天女さんへ）

「母の死」

母危篤の電文わが胸電撃す

死に神は直線走りふり向かず

呼べど答えず無常の風の吹くばかり

呆気ない散り際に心宙に舞う

もう聞けぬその唄淋しい胸に棲む

十万億土へ娑婆のたよりは無駄になり

百まで生きる太鼓判鬼が持って逃げ

み仏に昇華妹何故に泣く

亡母のみ霊を守れ無心の曼珠沙華

花知るやひと筋の血の痺く日を

忘れ得ぬ花ゆえ岸辺の影となる

積む想いあしたは空の雲となれ

影慕う愛の惨なさ積み重ね

忘れ得ぬ花ゆえ夢のあとや先

積みきれぬ思慕が真珠の露となる

偽れぬ心積み積み惜しむ春

夢と知れば心の庭の花ぞ散る

花愛しとこしえに愛果つるなく

落日に消えぬ淋しさだけ残り

灼きついた影を払えぬ走馬燈

胸を裂く木枯らしに花耐えて咲き

絶え絶えにはなれゆく日の流れ雲

愛無色となり得ずさびしい詩となり

星に託す夢とこしえに美しく

さびしさに勝てぬ涙は風が知る

幻の逢う瀬に生きる花の影

死ぬ日まで愛は不滅の譜を奏で

餅にもならない胸の花言葉

遂げざりし恋の涙にめぐる春

指先のとどかぬ距離で影絵炎え

てのひらに無色の虹をかくし持つ

忍ぶ日々風荒ぶ目とやわらぐ日

燃ゆる火の愛みのらねば夢で逢う

漲るもの癒やせぬ道をひとりゆく

貧富の差のせて地球の黒い影

奇型児を生んだ教育戦後版

断層の親子の夢は絵にならず

柔和な眸の奥にかくれていた背信

幽霊会社が庶民の夢を食いにくる

脱税は必要悪か根が切れず

脱税が性善説の首を締め

欲詰めた袋を忘れ去るカラス

夢のまま朽ちる哀しい青リンゴ

花道に光る涙の重い過去

つけ捷毛天女のような冷たさよ

眼に見えぬ恥を知らせる風の音

白と白との仲が淋しいすみれ草

炊煙はほっそり血を吸う鬼が増え

太陽に目隠しをして白痴の詩

微笑する仮面いつかは喰らう腹

欲の川集め砂漠に陽が墜ちる

てのひらに握り潰せぬ過誤ひとつ

まだ無理が通るありがたい民主々義

謀られた空虚な胸の重い石

潮引いて石は孤独の座にかえり

時流るる女の意地の黙秘権

こころ動かねば路傍の石と花

汚染度が目鼻に染みる無風帯

罪の鎖の尻っ尾を上手にしまう

「日本移民七十年祭」

血と汗で培いし花いまひらく

皇子、皇妃拝めば涙の出る不思議

天もくみす今日移民祭日本晴

両殿下迎え七十年の苦を忘れ

八万の歓呼に映ゆる日伯旗

大統領移民を讃う慈父の如

旗波に手を振る両殿下万々歳

街頭を埋めつくし先駆者映画会

泣いた過去の重みひしひし移民祭

パウリス タ 新聞柳壇抄

いつわれぬ心を花の白く咲き

火の鳥を育てる胸の湖が涸れ

煩惱の視野にひろがる灯が赤い

画布を朱に染めておんなが墜ちる闇

行楽の海に藻屑となるいのち

飢えた地のバツタが世紀の風を呼び

善知識で救えぬ闇の熔鉱炉

骸骨の貴賤が見えぬ白い闇

葛藤の魔風春風七変化

とこしえの指標に愛の詩をつづる

闇を透かせば欲に絡まる蔦かずら

皆闇の傾斜が雪崩れとなった血の渴き

絶唱の詩へ炎えのこる緋の血潮

余生なお余罪尾を曳く天ガ下

寂しさのつるひと日を風とゆく

吹けば飛ぶ影憂愁の雲となり

俺だけなのがせ火の輪の盆踊り

流れ流れて行く手が決まる北の空

死に化粧果てなき闇をゆくばかり

燃え殻の運命でのひらの不倫の火

澄む花のところに胸の火が狂う

火の想いたゆたう哀愁の空となる

炎えるもの消えゆく空の涯に倖ち

疑惑の眼が光るとゆがむ夫婦像

医は仁を全うし青き雲に乗り（今田ドクター）

公害も生きんがための因果です

返還の後も銃との腐れ縁（基地沖縄）

逢えば醒める夢に逢えない日の歎き

風に叩かれ愛ゆえ淋しい影法師

太陽雲に隠れ人間絶壁を這う

月落ちて童話は星の国に住む

金科玉条削って骨のない平和

石に挟まれ夢さえ底をつく生活

或る時は筆禍となりだんまりの紙とペン

表面の妥協へ術のないしこり

閉めきつた心の窓をほぐす薔薇

衝かれた急所の痛みに狂犬となる

人命も犬命も同じテロの前

企みの深さに海は凧いでおり

百万の魂を呑んだ海の傲慢

人権を無視した石の指導権

どこまで伸ばしても猿知恵の悲哀

耳をすませば風には風の涙あり

身動きが出来なくなつてから悟り

石に凭れた日から苦難のつきぬ道

ご都合倒産風雨残してさようなら

嘘のような死へ嘘のように星流れ

浮浪者の天国を地獄にして寒波

幸せを断ち切る石を捨てぬ鬼

闇抜けた思索に愛の灯をともし

花びらを剥がす不実の酒を酌み

神の予言の確率へ人間耳籍さず

どう舵を取っても血に染まる歴史

火のつくように鳴いている蛙の大試練

木枯らしに血の札束をぶら下げる

血の底にまだ秘めている虹の彩

虹を描く掌に原罪は生きつづけ

俺の弱味へ針刺す言葉を受け流す

俺が渡りかけると消える虹の橋

春萌えてこぼれ種にも神の愛

彼岸にはいつ着く夢か木の葉舟

空転の歴史へ沈む神の船

妥協して爪研ぐ不実積み重ね

拡がった波紋孤独の胸で受け

落ち首のわれに情けを知らぬ風当たり

積み上げた掟の高さへ揺れる脚

地球裏の星と妥協した旅草鞋

棒切れで突きあげる権力の盲点

エンゲル係数へ背を向けた粉飾の屍

執念の火蛾は奇跡の火へ自殺

慢心の旗手へ奇跡の骨と皮

善人の肩にめり込む嘘の塔

青粒の夢と希望を砕く雹

飢えと争い地上に残し星流る

花の素足が踏む運命の薄氷

地球が暗くなる火の玉の行進

敗北の身を鞭打つ風の音に耐え

一票の行方瀕死の民主々義

豊鏡の海から死に神のささやき
(三島事件)

ひとときの愉悦に永遠の灯を掴む

神ならぬ掟に本能歪められ

本能を没却糸の切れた凧

十人がみな惚けている倫理観

相剋のはむら群狼闇に吠え

火の踊り鬼が指揮する火の相場

神の微笑が雲間に映ゆる綾錦

地の果てに消える運命の影法師

侵略の凱歌を阻む神の旗

石を重ねて花の盛りを惜しみけり

満開の花に孤独の詩が生まれ

ほほ笑みのとどかぬ夢は冬の彩

温めた愛語が冬の雲に入る

孤慾の天窓から椰子の実がこぼれ

忘却の花びら四季を重ねゆく

花影を心にきざみめぐる四季

花吹雪恋は道連れ雲に乗り

麗わしき過去の花々胸に咲き

花吹雪無明を開く道しるべ

花の章が読めず極意を盗まれる

嫉妬心おんな甲斐あり風媒花

煩惱の視野に炎えてる紅椿

死に耐える地獄の責め苦火取り虫

北風になお起ち向かう意気捨てず

飽食と飢餓呪いつつ進む国

熱砂踏む風に命の炎ゆる日よ

因習は断てず運命の旗を振り

風よりも早く死命を刺す鬼

罪深き裸形が白濁の海泳ぐ

紅唇は火を噴き闇に幕が垂れ

国を呑む夢弾劾の歌となり

世を制す鬼は機を見て立ちあがり

鈴鳴らし好機を告げる風の使者

闇に座す石にこうろぎ詩を秦で

微笑みを絶やさぬ裏切りの絵看板

カラスが笑う人おのおのの倫理観

燦燭の風景の中に眠る夢

輪の中をはみ出す一つの黒い影

謙譲の陰におんなの矜持あり

過去の詩掌に海鳴りを聴いている

火を投げる憎悪にチリとなる命

相愛の炎ゆる切り口赤く染め

取り柄ない木偶に天下を倒す詩

愛憎の創痕自虐の風が刺す

記念碑に阿修羅の影の消え残り

謀殺の使徒暗がり矢を放つ

火を見れば後へは引かぬ鬼の歌

鬼吠えてひとひらの花闇に散る

修羅の道鬼が残した骨の数

鬼の涙が歴史のページ書き変える

椅羅星に因習の旗振りつづけ

殺されても殺してならぬ死刑論

中枢神経を憑く悪魔に攫われる

射程距離に入った影に湧く闘志

花吹雪思い想いに散るさくら

捨てきれぬ夢に煩惱の火が燃える

偏狭な視野に政治の幾曲がり

嘘を吐かねば政治家として落第だ

神の掌に負えぬ浮浪者地に溢れ

残照につなぐ詩の夢花の夢

明暗の死角を探る内視鏡

血の濁り溶けずエイズは輪を拡げ

二者択一己れの首は刻ねられず

踏み迷う残滓大事に風の中

掟少しまげて華麗な門くぐる

天も地も擲って鬼火に舞える

氷点下いつまで追うまぼろしか

賭けるものなくして北へ一直線

大臣の生き態兇戯がまだ抜けず

欲望の海に死の山横たわる

純愛の花は真珠の露宿す

年古りし涙の丘にかすむ視野

骨一本抱き立ちつくす石の影

石ばかり並べて夢を摘む政治

闇を凝視めて喝采のない海に入る

明眸の謀叛に視界もうきかず

情状酌量断つべきものは断つが華

黒々と地図塗りつぶす修羅の旅

白と黒の差別を衝いた大雪崩

残照に我執の影がまだ消えず

灼きつ　いた影にとどかぬ鬼薊

隠れ家のない雑兵の最前線

木霊返しの風が歴史の向きを変え

何が奇跡だ底辺はヒビだらけ

心の底を割る純情は馬鹿にされ

骨一本となり北風に身を曝す

つつましき人を殺した冬の彩

本能の紅バラ闇を引き裂ける

老醜を隠す手鏡剥げてくる

悔った風に特技を奪われる

「魂の故郷」

闇をつんざき太陽を謀殺する侏儒

万象は炎えて灼きつく影ひとつ

風よすさぶな炎える想いに散る涙

楽園の夢ぼうぼうと風に消え

死の予感ただようアスファルトの陽炎

ユーモアを解せず惨敗の向日葵

闇に向く餞舌、弱い心の灯

信じてたわが家のストが厨から

金蔓に嘘ひとつ増えふたつ増え

風の叱咤を微笑で包むあつい胸

取れるだけ取る政策の穴太く

雲を呼ぶ物質文明の血の涙

まぼろしの太陽に自滅の度を速め

魂の故郷で音なき風に遭い

熔鉱炉闇に血潮は疼くもの

血の彩もとどめず風塵の野に果てる

ひるがえす術なき鬼の火の呪縛

絶え絶えの道に木乃伊となる蝸牛

死の海が越せぬ人生無駄と知る

「本能の湖」

はためかぬ旗原罪のきびしきに

幻想の炎ゆる肢態をきざむ風

影ゆらゆら本能の湖よみがえる

標的の果実へ全能の血をしぼり

つつましき愛にはほほ笑む灯がひとつ

本能の衷しき命闇に炎え

胸のボロかくす奇術の鳩生まれ

身も心もささげる愛の影ひとつ

赤いみぞれが止むと果てない白い道

紅バラの苦悶に耐えている白紙

愛の折り鶴玉とくだける星もある

虹を見つめている間に闇が深くなり

風には風の情あり鬼も昼寝する

さい果ての空にも燃える雲のあり

魂をゆさぶる土鈴に父母の声

影踏みの仕上げを待たず死んだ鳥

割れた茶碗がつぶやいている寒い影

風の凱歌にひれ伏す鬼と起つ鬼と

絶え絶えのいのち故郷を見て死のう

「果実の微笑」

童心を盗心に変えて果実ほほ笑む

鈴を振る言葉にくずれる胸の塔

背信の微笑に措いた餅が売れ

無にして無ならず人生の虹が炎え

人は人をいつわり無法の山に死す

風は風に背かず自若の法を説き

煩惱の海に解脱の空がある

ふたたびは逢えない鬼の長恨歌

死地を彷徨う魂のない影を曳き

心動く聖なる乳房の煌きに

秒針の動きにいのち削られる

脱け殻が動けば動く影法師

心なき金の振り子に世は動き

金の鈴振ると地蔵も動きだし

眼に見えぬ動きに揺れる愛の花

真つ白い指標を北風に攫われる

赤い実の記憶が炎える風の中

限に見えぬ汚職の海が掌に溜る

試練の火獣心未だ捨てきれず

過疎村のさくらは遠き人を恋い

遠い遠い指切り切れぬまま残り

指切りのよみがえりくる日の孤独

化粧せぬ素顔の愛をたしかめる

断ちがたき思慕に炎えてる夕茜

権力の海に流れる血の惨歌

腹黒い鶉にこころ刻まれる

飽食の街に流れている挽歌

帆を揚げたばかりに渦中の人となり

時を移さず利害の波は山を越え

さだめなき愛につらなる幸不幸

雲幾重恋の炎の軌跡見ゆ

風に揺るる花影は日々濃く淡く

夢のこし風に吹かれてゆく影よ

燃える想いとどめて雲は空に消え

胸底に棲む影燃える日もあるう

名を惜しむ別れしずかな雨となり

肅条とみ山は木立の影を投げ

想いゆきぶる影にとどかぬ掌を憎む

ふるえてる胸にさびしい春が逝く

花のいのちに愛の光りはとめどなく

夢の世の想いとおらぬ影を抱き

ふり返る笑顔かなしい虹の彩

たぎるもの癒せぬ道をひとりゆく

愛火花となりえず秋の風となり

つもる心の落葉にさだめなき旅路

絢爛の夢をささえている孤独

想い千々にくだけ別れてゆく夕陽

つくしえぬ心うとまれ暮るる秋

海山のこころ明して風立ちぬ

さまよえる木の葉舟にも星が照る

さだめなき愛につらなる幸不幸

救われぬ思いおもいの夢ばかり

死の想いひと筋の愛つらぬく日

ゆきついた無色の愛にささげる詩

胸傷の癒やされぬ日の落葉の譜

絶えだえにはなれゆく日の流れ雲

紅バラが風に晒した血の行方

ほころびし花にゆれてる静心

心あらばわが世の花よひらくべし

反応のある日は炎える風媒花

拒絶反応赤い斑点見えてくる

溺れてはならない女の蒼い海

背にふれた言葉女の海が荒れ

溶け合えぬ彩たそがれの鐘を聞く

智の限界ガラスに爪は立てられず

信ずべきものなし胸のつむじ風

琴線に触れず音痴の垣に伏す

手鏡の裏に描いてる地図がある

空自を埋める歲月もう足らず、

夢多きいのちかりそめの風に果て

諦めが悟りとなった落葉の詩

風きびし保身のための廻り道

流れ身の世に逆転の燃える歌

盛衰の風が身に染む拓魂碑

笑くぼなお限裏に棲む遠い影

雑草の一生踏んだり蹴られたり

風に勝つ我流捨て身の燃ゆる剣

狼に化けた羊の年が明け

手応えのない浮き見つめ日が暮れる

切り口の赤きに夢をふくらませ

風紋の序曲に哀歎の雲流れ

美意識の海に揺れてるイヤリング

バラ微笑風の歩よりも軽い足

風のページに浮き草の夢はるかなり

虹を見つめる女奈落へ誘う風

波紋呼ぶ風が答えを洩らすから

別れては待つ人もなく落葉舞う

鈴鳴らす胸の愛の灯こむらさき

脱げるもの脱ぎ捨て残照に仔つ孤影

傷痕を隠せば炎ゆる罪の彩

虚像バンザイ無罪放免保釈金

炎えるものおさえきれない花の色

花束は枯れ相剋の海となる

暗がりに鬼の踊りの果てしなく

麗人の小さき欠伸盗み見る

海山のつきぬ名残りに鳴る汽笛

その意志を殺して生きる影法師

ドサクサの巷で誤殺された善人

身辺を整理しずかな死期の文

新生吟社月報

ひとつの転機・・・火の鳥を翔ばす

愛の山河さだめ哀しい詩ばかり

甘い夢見つづけている牡丹刷毛

誤植を正してわが運命を切り開く

間一髪危機を逃れた神の加護

逆説に生き返りたる死刑囚

呼び戻すこだま北風のふり向かず

浮き彫りの地金が神に見離され

落日の胸の砂漠を走る貨車

機関車の独走見て哭いている

執念が徒労となった流れ雲

裏切りの花びらに視界もう利かず

天下国家は山の向こうの世捨て人

風に晒した煩惱いつか自慰となる

不安定な足場に命攫われる

欲の手の届かぬ距離で炎える影

裏表なき友情の花吹雪

労わりの庭に花咲く夫婦像

餞舌のカラスが忘れて行った籠

晩鐘の余韻に孤独の詩が生まれ

鐘撞けば燃ゆる世紀の地平線

骨のある身を陽炎の野に晒す

闇を裂き奔流となる薔薇の精

精一ばいの嘘で死線を切り抜ける

刺のある言葉歩調を狂わせる

不用意な言葉に煮え湯を呑む予感

文化国車輪に生首ぶら下げる

鼻下の髭動き女豹の餌となり

虹の餌となることもあり人の運

特ダネの抜けがけ輪転機の大車輪

遮断された自由の女神の白い道

ためらいが還らぬ春の悔となる

箱庭に余白を埋める老の春

笑い飛ばす度量があつて道開け

不透明、男ごとろと女ごころ

バラ微笑深まる愛の時刻待つ

背信の月日へ火の鳥飢えている

夢白きカニの親子の砂の城

銀の砂ぬれて詩情がこぼれだす

血の流れに勝てず思想はくずれゆく

綻びる日を待つバラに雲幾重

止まらない疼き死線を越えてゆく

意地立てる愚より卷かれる処世術

インフレの怒涛を泳ぐ細い腕

煽動が焼き討ちとなり修羅となり

風の奢りに人は無口になつて耐え

炎えやすき血を包みたる喪服なる

軽み火のなお血を慕う別れ花

小さなしこりが海を隔てる距離となる

ことぶきの星座に翔ばす鶴一羽

その影を追うさびしさのつきるまで

かくし得ぬ苦悶の色に炎える薔薇

神の掌をはらい花芯を荒らす虫

純愛の満たせぬ壺をひとつ抱き

神ならぬ誤審が勝敗分ける鍵

傲慢な車輪が捉を踏みにじり

火の如き愛に絵の具を濃く溶く

海鳴りの底に秘めてる恋苦行

美人同席この旅雲の果てまでも

素っ裸になる運命の賽を振り

妥協せぬ男の胸にある孤独

嘘少し混ぜて浮き世の谷渡る

恥もなく古稀なお欲に絡まれる

春萌ゆる夢にふるえてる若葉

導火線金蠅群れて北へゆく

灯風船悪魔は闇を慕うもの

壺抱いてああ人生の下り坂

埋み火をぬくめ春が逝き秋が暮れ

胸に秘める愛語いつしか死語となり

貧政を否定百万の首を刻ね

傷痕の深さへ木枯らし吹きつける

夢つづるわたしの手帳に炎える影

神の摂理がある日美人の肌にふれ

虹の構図が月日とともに褪せてゆき

ふるさとの夢こだまする手鞠唄

熱線に爛れた罪が裁かれず

飢餓の民のこし豪華な貨車がゆく

愛憎の影をとどめぬ般若坂

石を裂く闇に鍛えた糞度胸

冤罪を晴らすポケットを裏返す

根はみんな善人環境が悪いのき

瞑想の蛙に蛇の舌が炎え

傷舐める負け犬に照る蒼い月

諸行無常花の香りも消え失せぬ

狂わない予言に女の血が騒ぎ

深層が読めぬ女の設計図

春の階段のぼると真珠の海が見え

友情の描けぬ凶面に迫る闇

血と汗を吸って異国に眠るドル

どの影も欲のかたまりジャンケンポン

アイコデシヨ崩れてつける鬼の面

世間知らずのみみずが踊る炎天下

劇中劇果てると寒い空がある

鬼が鬼を呪認する世紀の茶番劇

原爆の谷間を流れてゆく世紀

焦点をぼかして女が翔ぶ世紀

胸の傷癒えぬ形見の雛人形

愛の炎を抱いておののく闇の道

死に神を抱いてほほ笑むアスファルト

鉄壁の陣にも盲点抉り抜かれ

過去を抉ると熔りだされる罪の彩

理論では勝てず火の粉を撒き散らす

恍惚の海が火を噴く乱気流

裏がえすことの上手な卑怯な掌

アンテナにかかった街のスキャンダル

戦わねばならぬ序列が一つある

風の謀叛と人の謀叛の幾山河

虹の絵を透かすと擬装の塔が見え

地平燃ゆせめて死に花咲かせたい

奔放な花芯に風も向きを変え

万歳の歓呼に十指天を差し

世界一強い通貨で火の車

世界一の治安の中に撒くサリン

悲喜劇に耐えて十指にある未来

裏書きの死角で友情裂けてくる

闇を透かせば闇を貫く白い道

バラ色の夢暖流に乗　てくる

風に吹かれて行く処までゆく旅か

血を吐けば冷たい湖の底が見え

罪のない死体ゴロゴロ核傘下

下剋上の風に揺れてる金の塔

カラクリの海に溺れたロバの知恵

その先を読んでペテン師肩たたき

否応なく汚職の余波をかぶせられ

たよりないゴム輪エイズと対決す

享樂の祭典エイズ牙を剥き

狼籍のあとの虚しさ闇を縫う

倍じてはならない空の深みどり

忍ぶ傘花ははらはら散るばかり

純愛の花憂愁の雲となり

熱情の翼にふれる火の想い

錦着る胸に生きてる国訛り

垣のない訛り故郷の灯に浸る

再会すよくぞ戦火をくぐり抜け

カンテラに夢を育てた日の記憶

花の香に痺いた少年の日の記憶

春の風見果てぬ夢を追う素足

運試し意気に炎えてる青リンゴ

空想を措き疲れた不発弾

核兵器の舞台に空が狭くなり

傷心を包みきれない補償金

炎えるもの炎やして花芯朱に染まり

花の雨流るる日々を独り酌む

炎ゆるもの秘めて謙虚な花の色

妻不信男の牙城崩るる日

信じてた青信号が仇になり

汚ながっておれぬトイレに落ちた銭

背信に記念の指輪錆びてくる

埋み火の風にもふれず消えてゆく

灰色の空にたたずむ停年期

黒い白馬に黎明の花摘み取られ

見えぬもの凝視めおののく未来像

幻想の花芯に風の吹きやまず

絶壁のいのちエイズの危惧があり

人間脱皮核戦争でも起こそうか

遠ざかる雲に失意の鏡拭く

暮色肅条天地の愛の深さ知る

一蓮托生火の輪の踊りにかり出され

旧套を脱ぎ捨て女闇に消え

現せ身の風声哀詩きわみなく

視野つきるまでは見送るうしろ影

地の塩の愛に報いる風媒花

期待された男磁石を持って逃げ

死ぬために生きる無性に腹が立ち

長寿国自慢にならぬ痴呆症

独酌の相手が欲しい夜の底

聖域にふれると羊も暴れだす

割りきれぬ風若鷺の葬送譜

堂々めぐり方向音痴へ日が暮れる

噴煙抄

源泉を辿ると崩れてゆく神話

潮どきが読めず切り札抱いて死に

疼くもの秘めて青葉の道をゆく

死の美学火蛾は紅蓮の中に溶け

石の上にまだ座ってる古希の坂

火には火で対決歴史愚を残し

死金を墓まで抱いてゆく律儀

夢も涙も流れる胸の石だたみ

文明の傾斜へ酒樽のタガが切れ

一寸先の闇が裂けない夜叉の剣

存在感なくして闇に立つ樹影

掘り返す骸業火となつて荒れ

翔べるだけ翔んで落葉に還る詩

死の海を泳いで蛙無口なり

天皇が勲章を借る民主々義

聖処女がある日蓼喰う虫に遭い

首が飛ぶまで執念を燃やす蛇

過疎村に利害を知らぬ柿の色

成り行きの風が己に背かせる

海風いで無口の俺と根くらべ

掛け軸の読めない文字にこもる価値

花の命にふれて火を噴く風ぐるま

木枯らしを聞く忘却の石となり

復活の叢雲衝いて来た鬼神

争いし憶い出孤独を酌む湯呑み

花に舞う追憶の亡妻若かりし

通る世の紙魚に埋めた恋日記

遺産なき俺に未練のない人生

積み上げる石に悔恨の雨が降り

自然淘汰なき大都市の必殺隊

画布を朱に染めて女が墜ちる開

快樂の死角でエイズに蝕ばまれ

火と燃えたあとが哀しいカルナバル

北風の叱咤仮面を剥いでゆく

タンポポの夢がひろがる地平線

頂上は地獄と知らず伸ばす欲

汚染に溺死する文明の花言葉

八合目までは我流で従いてゆく

幸運を足蹴にボクの夢凍る

掌の虹でのひらにとどまらず

ふらふらと乗った久遠の迷い舟

追いつけぬ風もあなたも絵空ごと

メイドさんドルの在処を嗅ぎつける

隠し場のない罪胸に仰ぐ月

六文銭ならべて虹を狙う獏

礫の乱舞に臍を固めている波璃扉

原色を溶かして無色となる夫婦

雲の流れが物憂い夏の昼下がり

夕茜あすなきいのちしかと抱く

倒錯の掟に地球揺れやまず

花影は哀しへドロと隣り住む

花の謀叛が男の視界ゼロにする

闇抜けた空の蒼さにある眩暈

火の試練くぐり欣求の岸に立つ

国民を泣かせて溝に捨てる金

ここで止めておくと再起の術もある

信をおく微笑に砂を噛まされる

いつまでも咲かぬ心の風媒花

流れ去り吹き去り残りしものの価値

絢爛の夢から醒めた冬景色

底辺の海は浚渫せぬ政治

火の粉降り怠惰な牛も起ちあがり

ガラランチードが怪しくなった日本人

影法師の長き夕陽に佇つ農夫

血の汚れ気にせぬほどに移民老い

雑兵は骨も残らぬ土饅頭

告白の出来ぬ時効となった罪

絶対絶命一本道を攻めてくる

闇の深さへもう踊れない影法師

濃淡を秘めて欲ある掌のぬくみ

試行錯誤の中で馬身をととのえる

不甲斐なきわが身を責める夢ひとつ

かくせない額の疵の物がたり

いくら振り回しても空拳空を裂く生活

天地晦冥心眼光りを失わず

人情の機微には触れぬコンピュータ

試験管ベビー明日は寒い寒い空

神の座へ白磁の色の雲とゆく

眼つむって死期を見つめる痩せ蛙

郷愁の真つ只中の銀世界

物思う刹那刹那に雪が降る

明言の死角を衝いて来た勇者

言葉裏に己を縛る罫がある

正確無比誇る日本の事故焼死

郷愁のドラマの中に炎える花

募る想いは解けず心の氷点下

郷愁の一つは暑い国へ向き

友情の濃きを彩るあかね雲

不精髭の男が合鍵持っていた

愛ひとつどこまでも月従ってくる

転生を待つ蝙蝠に攫われる

自由の天地行くあてのない過保護

消費税慣れるとアバタも気にならず

無事の民を襲う真昼の侵略者

神々の調べ綾なすあかね雲

汚職脱税必要悪に踊る国

高度成長孤独が増える福祉国

人を喰い金を喰い逃亡する政治

望郷の孫子が夢路を豊かにす

脱皮して肥えたトンボはもう翔ばず

原点を探す暗室に緋を溶かす

六十年真の己をまだ知らず

臭いものに蓋して人間不在なり

白黄赤春の息吹きが地に溢れ

愛のない一語に平和は破られる

この旅は青磁の色の雲に会う

終焉の旅へ冷たい星が降る

能因抄

幸せの扉に不幸の鍵をかけ

種芋を喰うと夕闇深くなり

一度越えた死線は二度とくぐるまい

傷ついた貌に夕陽が眼に痛い

奴隷の血国の礎石となり栄え

省略の出来ぬ男の寒い影

青春の地図に自爆の傷のあと

傷痕の深さに秘めている叛旗

遠い遠い忘れられない母の味

愛を説く智者が選んだ地獄篇

時々には美貌の女が鍋焦がす

銀の雨あすなき命のカタツムリ

変身の出来ぬ蝸牛の野垂れ死に

呵責なき運命たそがれに駄馬を曳き

裏切りの微笑に刃齒が立たず

無抵抗の花をも風が裂く仕打ち

運命か人災か蕾のまままで散り

逆転に賭ける埋み火の消えるまで

核を背に平和の念仏地につかず

風は風を語らず虚空に消えてゆく

瑞兆は希望観測猛る風

慰安婦の悪夢はツケとなつて荒れ

盗作をわらうわが影恐くなり

屍は累々蛆虫の凱歌あり

嘘つかみ真実捨てて疲れた掌

相思樹に春の陽差しは絵のごとく

神秘のヴェール脱ぐとゆらめく花の精

恍惚の兆か詩囊は空っぽで

登りつめ蝸牛未来を占える

「ぶらじる川柳」誌

殺し合った過去記念碑は美しい

末の世を措くは悲し原爆忌

無言劇見えないものが見えてくる

合わせ鏡に熱い想いを伏せて生き

罪のないあなたを騙す悪い趣味

蛇群れて神の存在危くす

間の抜けた世辞を美人の鼻にのせ

同席の麗人飽かず見て別れ

迷路から迷路さまよう恋苦行

仇し野に燃えて拡がる火の構図

死の影がよぎる瞬間星が炎え

四季荒ぶ涙は馬のたてがみに

肩撫でた掌ゆえ謀叛が身に染みる

むかし純血今は混血花ざかり

あかね雲思考の外に立てる馬

運命の相剋死んでもよい孤独

欲望の翼をエイズに刻まれる

健やかな乞食に負ける腹を裂き

裸にはなれぬおんなの冬籠り

侏儒らが羅漢を謀殺する世紀

死の刹那生の刹那を炎える花

生き抜いた証老斑 つわらず

華麗なる演出不信の舞台裏

反逆の歴史軌道を外れてゆく

精一ばい燃えてもたよりにならぬ虹

子と孫の誇り地震のない故郷

花の色炎ゆれば炎ゆる影法師

赤い血を秘めた喪服が脱がれない

真っ直ぐに見えて歪んだ人の影

執着の鬼弾劾の風に消え

泰平のムードの中の裸者と死者

銀の砂洩れ空き瓶を下げてゆく

爪染める罪を逃避の白い指

風絶えて行きつく俺の寒い駅

花の影消えて見つめる青い空

ひとりびとりの愛たしかめて燃える四季

幻の花圃にい集した蝶の眩き

眼つむって死魔とたたかう夜の底

風雪の傷みに耐えて咲く樹氷

怨念の海へ羅刹の剣を研ぎ

償いの罪に血を噴く尾髄骨

理非捨てて木枯らしに晒す聖なる血

国を売る鬼の化身か自衛官

無に等しい俺を捨てない影法師

朔風が砂塵となって攻めたてる

虹を追う鬼さすらいの影を曳き

背信のガラスを砕く血の訴訟

埋み火の彩移りゆく日の焦り

変身する女に変心する男

年輪はひろがり視野は狭くなり

断ち切れぬ絆に慕情の灯がゆれる

獅子も虎も二の足を踏む蟻地獄

必要悪戦争という巨大な火

マイズオウメーノス杓子定規で渡れぬ世

体験のための手術が命取り

さりげない言葉に崩れてゆく構図

透きとおるガラスが歪んだ影を投げ

熱唱の蛙に次元のちがうバラ

研ぎすます必死の剣が断つ鉄鎖

哀歎の花びらネオンの影に揺れ

地の塩が吸えない花の呪詛を聴く

火の海は渡れず野望砕け散る

とどめるものなく海鳴りは過去となり

知りつくす性にかすんだ夫婦像

自他ともに許し火炎の中に入り

火をかぶる愉悦悟道は将の外

一瞬の死へよろず世の生を積み

よみがえるものなく胸の砂あらし

乾杯の笑顔がうるむ優勝旗

人権を無視する原点の文字を消し

頭脳結集世紀の凱歌露と消え

なりふり構わず屍臭を讚美する鴉

許を透かせば金蔓にひかれる顔と顔

悠久の星となる日へ積む詩片

星墜ちる予感深夜のベルが鳴り

わが位置へ戻れぬ舞台に立たせられ

火の言葉の行方わびしく掌にかえり

背伸びした影よ夕陽に輝く鴉

SEX革命に取り残された俺の愚痴

色模様揺れる日もあり夫婦像

相合傘やぶれ火のような恋だった

木枯らしに血の包までは変えさせず

欲と過失の世は涯知れず果て知れず

命無駄に無駄に大都是たそがれる

人を喰う女豹の倫理の車押す

天地晦冥鬼神謀叛の血を流し

花の香に酔うひとときの哀しさよ

おにぎりを山から落とす木偶の宴

ひとつしかない人生やさしい人が好き

全 伯 川 柳 大 会 句

過去よりも恐い未来が待っている

だんまりの石が盲点衝いてくる

幻聴の風に革むす流離の詩

頂上に立てば冷たくなる太陽

生ひとつ死一つ不滅の詩を愛す

夢摘まれ摘まれ果てなき石畳

陶酔の視野に映らぬ狂った火

血みどろの歴史に凍る福音書

狂人が笑う夜明けのない呪縛

天を焦がして地球は骨の祭典

裸身煌めき獣心の虜となる

冷たい巧者の骨を抜いてやろう

天と地が裂ける謀叛の血を浴びて

ケシ粒のいのち激動の世に耐える

人絶えて夢よみがえる大自然

お月さまと泣いた乙女はもう居らず

天も地も人も信ぜず農夫痩せ

大気汚染こころの詩は汚すまい

世を照らす聖者の旗は血に染まり

新生吟社 二百回記念 入賞句

音のない風の殺意に揺れる樹々

嘘まこと紙一重いな天地の差

芝の青人間の成長度を笑う

美は競うものに非ず山ざくら

安らぎのない花今日も風にゆれ
涙散る栄華の夢のさかずきに

「コロニア詩文学　コロニア詩歌」

血と汗を搾り砂漠へそそぐ河

倦むこともなく棘のあるバラ愛す

研ぎすました頭を猿に喰われる

黄色い服が似合う真昼の侵略者

透明な言葉の裏の蟻地獄

惜春の海へとどかぬ野暮な自慰

全身の痺きを薔薇にぶつつける

菩薩では勝てぬ魔神が攻めてくる

グワラグワラと地球崩壊の夢を見る

幽霊屋敷の太鼓が人生狂わせる

豊饒の地に暗雲の垂れこめる

錐もみの特技に見惚れ庶民痩せ

桃源境に消えた二人の重い罪

夢は夢で終わり永遠の闇に入る

流される掟に風の子また生まれ

樹々萌ゆる失いしもの大きさに

神の眼はそらせぬ・・・受胎

木霊だけが知っている白い絶唱

凱歌あげ海が攫ってゆく手帖

漂泊の百年おんなは翔ぶ鳥に

幻想の仕掛け花火の彩に酔い

手鏡に自他をいつわる花の影

海が裂ける神話に爪を立てる猫

風吹けば風の子となり野に果てん

本能の影みな暗く地を裂ける

権力の垣根を飢えた眼が覗く

風そよぐ野に佇つ過去の火を胸に

僥倖の海へ野心を捨てた石

無間地獄の中にほほ笑む祖先の碑

「白い砂丘」 第八回武本文学賞入賞作品

人ゆるすところの窓の春の風

向日葵の媚態に吊るす鬼の首

札束に憑かれ辿ってゆく迷路

愛を呼ぶ風に国境の雪が溶け

花吹雪炎えるいのちのあとや先

虹の絵が凍る心の氷点下

灼熱の記憶が停年の掌に溜る

躓いておんなひとりの坂にたち

白い砂丘を白い炎が灼きつくす

その影を抱けば迫る冬の彩

風鈴のまだ秘めている野望の火

飢えた眼の錠を怖れぬ爪が延び

指切りの掌によみがえりくる孤独

花の身の痺きを知らぬ風の音

白無垢の胸の手帖を盗まれる

陽の目見る夢に疲れた尾てい骨

黒い豹は黒い画集の中に死す

灯風船よそれほど闇が見たいのか

一枚ずつ白紙剥がして日が暮れる

「川柳初期の頃」

戦後の荒廃したコロニアに曙光を見出したのは、新聞の文芸欄に、短詩型文学といわれる詩、短歌、俳句、川柳などが続々と誕生して、殺風景な社会に潤いを与え、八年間の空白から解放された時であった。

堀田栄光花師は、新興川柳の旗を掲げて「日伯柳壇」を創始して、全伯の同志を糾合、「ぶらじる川柳」の発刊に漕ぎつけた。

その当時、私はノロエステ変更線の、プラナルト町から九キロメートルの地点で、米、棉などを作っていた。或る日のこと、ミランドポリスから出利葉円耳楼氏が来訪され、今度グワラサイ町に、川柳吟社を創るから参加してくれとの要請があり、好きな道だから快諾した。

発会式には、故人となった芳賀裸人、佐藤碧村両氏と、現存の出利発円耳楼氏、森山天拝氏、里州田不知火の五名が集まり、裸人氏の提唱で、新光吟社と命名された。

初句会后、“寄せ書き”「記念撮影」をして別れた。
(直後、故野々村多朗氏入会)

当時、柳人たちの川柳に傾ける情熱は、計り知れないものがあり、野良で鋤を引きながら、脳裏に浮かんだ句は、メモ帳に記入したり、夜中に起きて忘れぬうちに書

きとめたりした。

中でも碧村氏の意欲は物凄く

妻は縫いわれは句作に夜は更ける
碧村

この句が出た時は、栄光花師をして、“川柳が身体の一部となりつつある”という「評」が付いていたのを覚えていいる。

新聞柳壇の巻頭を狙って、全伯の柳人がひしめき合っていた時代である。

「日伯柳壇」は、雑詠と課題吟の募集をしており、「旅」という題が出た時、

天空をゆく旅もあり牛ぐるま 魔門

が巻頭を飾り、秀吟の中に、

添うに添われずあの世へ旅立ちぬ 不知火

が入選して、しかも、“鋭い川柳詩眼を持つ人である”との師のお褒めの言葉を頂いた。

それからボヤボヤしてはおれないと発奮して、二十句、三十句を投句した。

雑詠の投句は、句数に制限なしであったから、五十句、百句を投句する人もいた。

私が始めて金伯川柳大会に参加したのは、第五回目の文化協会サロンで行われた時である。

米、ソの月をめぐる競争が始まった頃で、その時の席

題は「月」と出題された。

月の裏見えて人間の裏見えず 酒井 繁一

この句はよく時局を捉え、人間の醜い面が何のこだわりもなく、素直に詠まれていて、今も心に残っている。

現在までの大会席題作品中、最も好きな句。

今年ぶらじる川柳四十年を迎えるに当り、この様な華やかな時代を回顧して、今後川柳の価値が一層高められてゆくことを祈るものである。(二九八九年)

「恩師を語る」

小田百枝先生

早生まれのくせに、小学校に入学したのは八才の時、私は父母が宥めすかしても、ごねて入学を拒否し続けた。

今考えると、みすみす一年を棒に振ったのである。翌年は何の抵抗もなく学校の門をくぐった。

その時、やさしく導いて下さったのが小田先生で、非常にきびきびした態度で、「ハナ」「ハト」「マメ」「マス」から習い始めて、「夕焼け小焼け」が最初に覚えた唱歌であった。

先生はスポーツに秀でておられ、乗馬が得意であったと記憶する。半年ぐらいいで馴染んだと思ったらお別

れで、とても空しい気持ちであった。

伊藤次郎先生

旧制中学校出のとても厳しい方で、授業中に隣の級友とコソコソ話でもしようものなら、教壇の上に立たされて、軍隊式のビンタが左右の頬に飛んだ。私は恐しくて身じろぎもせず本から眼を放さなかった。

或る日村の顔役の息子を撲ったことが原因で、わずか二ヶ月で教壇を降りて行かれた。

一九八八年に、私が文化協会の受付にいた頃、よく図書館に出入りしておられ、書道の展示会が好きで批評を聴かせて頂いた。

達筆であつたが、間もなく亡くなられた。

高森春雪先生

熊本県出身で絵の上手な方で、「竹林の虎」の絵が得意で、今も何処かで、親戚の方が保存しておられると思う。

奥パウリスタ線で、土地売りをしておられたことがあり、お別れしてから二十年ぶりに、パールパライゾのレストランで偶然に再会した時は、向こうから“黒田ではないか”と声をかけられ、「あつ、高森先生」と言つて固い握手を交わした。そして暫し時の経つのを忘れて語り合つたことがあつた。

先生の事業は順調に進んでいたが、息子さんを亡く

されたあと、後を追うが如く他界された。まことに残念なことであった。

山口久子先生

女子師範出の先生は稀に見る教育熱心で、覚えの悪い生徒には、手を取ってかゆい処に手が届くような教え方をされた。

国語の得意な私には、四年生に進学した際「巻七」を飛ばして「巻八」に特進させて頂いた。学芸会では、“浦島太郎や“サル・カニ合戦”が人気の的となり、父兄たちの拍手喝采を浴びたものである。

敬慶なカトリック信者で、サンパウロ市に移転されてからは、“聖母婦人会”の役員として活躍されたこともある。

清水秀四郎先生

小学校在学中、八人の恩師の中で、最もスマートで、常に真っ白いシャツが印象に残っている。ピストルの名手で、或る日校庭に現れた“山荒らし”を弾丸一発で仕留められたのには舌を巻いた。

先生については忘れ難い思い出がある。

新年に行なわれる学芸会の稽古中、豊臣秀吉と後藤又兵衛の劇で、私は片桐且元に扮していた。この劇が何度繰り返しても思うように行かないので、嫌気がさしていた先生は、“みんな本気でやらないと恥を掻くこ

とになるぞ”と言われた。その時、私が隣りにいた本間八郎君に、“恥を搔くのは先生だよね”と耳打ちしたら、耳敏い先生は教壇でこれを聞きとられ、“黒田、今お前何と言った、帰れ”と凄い剣幕で激怒され、一週間の退校処分を受けた。私にとって一世一代の大失敗であつた。

これが元通りになるのに大変時間を要したが、児童劇はどうにか形がついて、正月の学芸会は村民に見て貰うことが出来た。

それから半年後、サンペードロの晩、どのような問題があつたのか定かでないが、沢山の書物を焼いてどこかへ移転された。理由は今もって詳かでない。健在であれば九十才近いと思う。

渡辺郷一先生

福井県出身の清水先生の後任に、福岡県博多の修猷館出の恰福のよい、そして頭脳明晰な渡辺先生は数学が得意で、葡語も堪能であり通訳が出来、当時としては珍らしい存在で、諧謔的話が上手で異色な人であつた。

山口広光先生

高等学校出で歴史が専門だったので、歴史の講義になると、時の経つのを忘れるくらい滔々とした話ぶりだ、“国文教科書”を懇切に解説して頂いた。字に喧ましく点一つも疎かにしない性質で、卑し

いという字を「卑」つまり、“白”から直接下までノを通した間違いを指摘されたことがあり、一画少なくなるからと言われた。

「南米時事」紙上で行われた、徳尾溪舟氏との“たばかる 論争は今も尚、私の脳裏から離れない。”

ペードロ・リベイロ・ダ・ノロンニヤ先生

最後にポルトガル語のノロンニヤ先生がある。

日本語の先生は七人も替わったが、その間、終始一貫してポルトガル語を教えて頂いたノロンニヤ先生は、六尺豊かな偉丈夫であった。

護憲革命のサンパウロ軍の兵士であったが、ゼツリオ・バルガス大統領の礼賛者で、よくその話をされた。ブラジルの歴史の講義の中で“インジョ”と“奴隸”が話題に上った。

先生が辞任された時、私たち学友が四、五人連れだつて別れに行った。その時は大変なもてなしをして頂き、珍らしいものを沢山ご馳走して下さいました。

ピストルを腰に吊るして歩いておられた先生の姿は、永遠に忘れることが出来ない。

諸先生にはそれぞれ特性があり、それらを総合したものが、私の人生の指針となっている。

「兄のこと」

兄が小学校一年生の時に私が生まれた。

私たちは随分性格の違う兄弟である。

波伯した時は、彼が十二才で小学校を卒業する少し前であつた。

私には日本での記憶は殆どないが、兄は教師と撮つた写真もあり、友達も大勢いた。

ブラジルに着くと同時に、兄は父母や叔父と、エンシャーダを担いで、コーヒー園の除草に精を出していた。

小柄ではあるが、生来の負けじ魂があり、何の仕事をしていても先頭に立って働いていた。

父や叔父と競争しても負けなかつた。

私もブラジルで日本語学校を卒業すると、猫の手も借りたいその頃の農家のこととて、山に引つ張りだされた。

而し、私は鍬を引いても、稲刈りをしても伸々仕事がかたがた、いつもビリから従いてゆく始末であつた。そのような私に仕事の要領を教えてください。“早めし”“早くそ早ばしり”ということをよく言つてそれを実行した。

私にはその三つのうち一つも出来なかつた。

馬を放す時は、兄が一鞭当てる、糸で線を引いたよ

うに真つ直ぐ進むのであるが、駁者が私にかわると、馬はどうも道草でも喰いたいという態度で、しまりのない動き方になる。

どこに違いがあるかと言えば、“厳しき”と“ゆるやか”を、馬はチャンと弁えているらしかった。

陸上競技大会の時期になると、一日の仕事で疲れている身で、青年団員が夕刻練習に励んでいた。毎晩月の光を浴びながら、五千米競走を最後まで走り抜くのは兄と同僚の青年二人きりであった。

一九五一年に私は独立して棉の栽培を始めた。天候に恵まれて、棉花の大豊作が伝えられ、値段の方も収穫の最中に百五十クルゼイロを突破して棉作者たちは未曾有の好景気到来で浮かれていた。

私は虎の子の三百アローバを棉花会社の倉庫に積んでいて、一体どこまで騰るのだろうかと相場の行方を見守っていた。

ところが、それまで上昇気運にあった値段が崩れだし、百四十二、百三十八、百三十三クルゼイロと日を逐って下落して行った。

それでも自分としては、まだ百四十台に戻ると予算を立てていたのだが、翌日は百三十となった。

この時兄は懽然として“今日俺は会社に預けである棉は全部仕切る、お前のも一緒に”と言ってネゴシオをしてしまった。

私は惜しい気がしたが兄に従い、代金三万九千クル

ゼイロを受け取った。

その後は値段が持ち直す日は殆どなく、毎日下げに下げ、連に八十九クルゼイロまで落ちた。この時は兄の決断によって大損を免れたのである。

町には日本で相場をやったという仁がいて、グラフを作って講釈をしていたが、この相場師の予想は完全に外れた。

一九五六、七年噴、棉景気に煽られて、借地人や日雇いを集めて大面積の棉栽培をした時は、棉の収穫期に入って長雨が降り、棉摘みを雨の中で行う事態が起こり、絞りながら摘んだ柿を倉庫に積んでおくと、湯気が立ちはじめ発火するのではないかという危険さえあった。この捨てなくてはならないような棉を、兄は周辺のあらゆる棉花会社を歩き回って、みんな売り捌いた。

景気の波に乗った彼は大耕主を夢見て、傾きかけた隣接する土地を買い取って、ジョン・ゴラール政権末期にはあと二、三百域で一千域に達する、それまでは思い切り腕を揮るう話をしていた。

熊本県知事沢田一糖氏の訪問を受けた時は、立派な揮豪をして貰った。

而し、運命の“サイコロ”は、ジョン・ゴラール政権の崩壊、軍事政権の誕生とともに、盛大転機を迎え思わぬ方向へ動き出した。

緊縮政策によりそれまでの政治、経済情勢は大きく変わり、金融面に厳しく、貸借に狂いが生じ、友人への

裏書きが命取りとなり、折角購入した土地を手放す破目となった。

時流の赴くままに拱手傍観すれば、素っ裸になることを直感した時、最後の砦である本部耕地は、明日に迫る期限を前にして、一日の中に法的処置を執り難を逃れたのである。

人生には幾度かの幸運と、不運の岐れ目がある。その時期を掴むかなげうつかで、その人の運命は大きく転回するものである。

ブラジル生活六十二年の間、色々な問題があつたが、大東亜戦争の推移について、的確な判断をしていたこと、元日に害虫の発生を発見し、祝日を返上して殺虫に当つたのは今も忘れられない。

一九九一年十一月九日

「コレラ騒ぎ」

隣国ペルーに始まった伝染病コレラは、近くの国々に拡がって、死者の数は三、五〇〇人に達しているとの最近の新聞報道で知った。

伯国政府の神経質ともいえるコレラ防止対策により、アマゾンとマット・グロツソ州の一部に侵入しただけで、全土に蔓延する可能性は薄らいだようである。

今度のコレラ騒動でもっとも大きな被害を蒙つたのは、蔬菜栽培農家とフエイランテ、そして魚のバンカを

持つ人たちである。

ナタール、新年からセマナ・サンタにかけて上昇を続けた、寿司や刺身に欠かせないマグロは聖週間を境にして落ち目となり、三、五〇〇から四、〇〇〇クルゼイロの史上最高値がわずか一、〇〇〇クルゼイロに下落、それでも買い手がなく魚屋は閑古鳥がなく有様であり、葉野菜も同様、一株八〇から一〇〇クルゼイロのものが、五〇クルゼイロでも敬遠されており、ある特定の人を買ってゆくを見かけるぐらいである。

人間の群衆心理は恐ろしいもので、一度何か問題が起こると、これが解決に至るまでは、随分長い月日がかかり、どんな新鮮な魚であれ、野菜であれ見向きもされない。

このことで思い出すのは、一九六四年軍事政権が誕生した年に、オウロ・パラ・ベン・ド・ブラジルとして政府に献金（金の鎖、指輪など）を奨励する運動が起こり、全国津々浦々から金を集めたことがあった。

国会議員や、州議員の中には忠誠を誓うために、結婚指輪まで献上して、奥さんといざこざを起こした人もいた。

恰度その頃どこからともなく、肉牛はホルモンの注射で肥らせているから、牛肉を食べると男性の象徴が役に立たなくなるという風説が流れ、世の男性は勿論、ご婦人方もこれは一大事と、牛肉を買うのを止めてしまった。そうなると肉屋はあがったりで、多くの牧

場主たちも、青空とパストの牛を見て嘆息したのである。

これは当時翔ぶ鳥も落とすといわれた上院議長（牛の王と呼ばれた）に対する嫌がらせであることが判つた。

上院議長はブラジル中の金を集めて大いに儲けたと伝えられる。

さて、ここでもう一つ一昨年の中頃であったか、バタタの水銀事件というのが発生した。バタタ栽培に、一部の農家が虫除けに水銀剤を使用したのが発覚、これが大々的に喧伝され、家庭の食卓やレストランからバタタ料理が姿を消してしまった。

ひと握りの人が悪事を働くと、四方八方に飛び火して、正直な者まで大波を被る結果となる。これが原因で、コチア産姐も、今年度は有史以来の赤字経営になったとのことである。宣伝とか風説によって、人の心が如何に動揺するかという好例で、これからも、私たちが夢にも思っていない色々な問題が発生してゆくであろう。

「温泉旅情」

娘と孫に誘われて、ポツソス・デ・カルダスの温泉に遊んだ。

三月一日午前八時サンパウロ市を出発、交通渋滞の市

内から、アニヤンゲーラ街道まで約一時間を費した。カンビーナスまでは驟雨に見舞われ“咫尺を弁せず”で前に行く車がボンヤリ霞んで見える。ノロノロ運転で一向に進まない。

而し、モジ・ミリンを通過する頃は、雨が止み快適な旅となる。

午後一時までに到着しないと、従業員組合のレストランは閉めるので、何としてもそれまでに行き着かねばならないと、気が気ではなかったが、何とか間に合った。

温泉の街に近づくに従って、山また山、それに続く峰の眺望は、さながら日本の景色を見るようで、ブラジルにこんな美しい所があったかと思わず感歎した。

山の中腹には珍らしくコーヒー樹が植えてあり、日本の蜜柑山を思い出した。

山並みに連なって咲いているクワレズマが、一幅の風景画となっていて実に見事であった。

ポツソス・デ・カルダス市は、標高一六七〇メートル、入口一四万一千人といわれ、街路はよく整備されており、サンパウロから出かけた私にとって正に別天地の感じがした。

水が豊富な所為か、朝起きてホテルのロビーで休んでいると、撒水車が街路を洗っていた。

水は異臭がなく、水道の水でも飲めるとのことで、流石は飲料水の本場だなあと思った。

温泉は浸ると、全体がぬるぬるとした感じで、何となく皮膚病に効くような気がする。

入浴時間は十五分で、普通、二・六五〇クルゼイロ、アポゼンタードは、二六〇〇であった。

貸し切りバス（半日、大人、一・五〇〇クルゼイロ）で、近郊のフルナス発電所や、ヴェール・ダ・ノイバの滝（花嫁が着るヴェールに似ている）を見た。滝前にレストランがある。

街の名物である陶芸品、毛織物、石鹼、貸しボートなど一巡したが、観光都市として、日本のようなサービスに欠けていると思った。

次の日は、自然と人工を折衷したような広い公園を散策したあと、孫娘にせがまれてケーブルカーに乗った。市の中心から山頂まで十分ぐらいで登りつくが、電線の継ぎ目を通り抜ける時、酷いバウンドがあり、同乗の孫娘は大喜びではしゃぎ回っていたが、私は冷キンの連続であった。

頂上のキリスト像は、リオのコルコバードに似せて造ったものと思われるが、剥げ落ちていて、見すばらしいものであった。

此処でも高所恐怖症にかかり、市街の全景を眺めるとすぐ降りた。ケーブルカーの運賃は往復大人、三千クルゼイロ、子供は半額で満員、よくこれだけの客があるなあと思った。

娘が風邪を引いて、頭痛がするから薬を買って来て

くれといふので、孫を連れて薬局に行く途中で、私の腕の中で眠ってしまった。一寸困ったが仕方がないので抱えて街路を横断中、サンダルの片方が知らぬ間に落ちたのを、学生風の娘さんが拾って来てくれて“両方ともあなたが手に持っていていきなさい”と親切に教えてくれた。中には項垂れている孫を見て、“どうしたのか、病気ではないか”と、尋ねてくれる婦人もいた。わずかな事であるが、人情の温かみをしみじみと感じた。翌日は三井肥料会社が市に寄贈した日本庭園の見学に行った。

深山幽谷の中に四阿があり、池には鯉が放流されていて、つつじや椿、ヒマラヤ杉など植えてあり、これは日本人の誇りだという感じがした1・。久しぶりに都塵を洗い流した清々しい旅であった。

一九九四・三・九

「北伯旅情」

一九九四年十二月十一日から十八日まで、一週間に亘り、アラゴアス州首都マセイオ市と、サンターナ・ド・イバナマ市を訪れる機会を得た。

この旅は、息子が北伯の女性と結婚することになり、娘や孫たちと一緒に、その結婚式に出席するためであった。

十二月十一日午前八時、TAM航空機でコンゴニヤス空港を翔びたち、ビラコツポス空港で給油後、同空港を離陸したのが年前八時五十分、凡そ二時間五十分後マセイオ空港に着いた。

それからマセイオ市まで、二十七キロをコンビで送って貰い、宿舎、BRITZホテルに旅装を解く。五階建での中流ホテルで、私たち四人は同じ部屋に宿泊した。

マセイオ市は海拔五米から四十米で、人口七十五万人、有名なコーロル元大統領や、PCフアリアを生んだ土地である。

マセイオ市の海岸通りは、椰子の並木が果てしなく連なり、椰子の果汁を売る屋台が無数に並んでいる。

海岸の一部は、市中を流れる河から放出される汚水のために、臭気が凍っており、風向きによっては市内まで悪臭が浸透することがある。

この臭いはチエテや、ピニエイロスの河に負けないもので、所謂工場や家庭から垂れ流しの所産なのである。

市内を旅行する時、バスを利用しようとしても、目的地に行くのがなかなか来ないので、バス停で待っている人を、コンビで運ぶロタソンの商売が繁盛している。バス賃は安く、市内は三十セントであるが、ロタソンは行く場所によって、五〇セントとか一リアル徴収していた。

マセイオ市内には、北伯名物のラゴスタ（伊勢海老）、エビ、タコなどの料理があるが、存外高価で、ラゴスタ料理は二六リアル、ラゴスタとエビの混淆料理は一八・五〇であった。

これに反して、シユラスコのロジジオは九リアルとずっと安い。このような料理に飽きが来たので、中心街を散策していると、日本料理「長門」という看板が目についた。この店は三年前から日伯折衷の料理店を始めて、殆ど伯人だけの客で繁盛しているようであった。

因みに料理の値段は刺身定食、二二リアル、焼魚定食、一八・五〇リアル、ご飯一膳、四リアルで、久しぶりに味わう日本食はとても美味しく、同店で三回食事をした。

海には「青い海岸」という内海があり、四十九キロを遊覧船で見て回り海水浴を楽しんだ。三年九ヶ月になる孫娘が泳ぐのを見て吃驚した。

次の日は、海岸から二キロ位の所にある遠浅に小舟で行き、水深一メートル程に、多くの帆船を浮かべ、二時間ばかり「海の幸」に浸って喜び合った。

三日目は、“フランス海岸”という一五三七年にフランス軍が駐留したといわれる、八キロに亘る海の中にある自然の防波堤を飽きもせず眺めて写真を撮った。この防波堤に打ち寄せる波は荒いが、内海はいつも穏やかである。

この地方の人は殆ど褐色で、白人はサンパウロから

出かけた観光客の他は数少ない。言葉には北伯耽りがあり、語尾をあげる何となくやさしい感じを受けた。一九二八年から三四年まで、ランペオンが跳梁した所で、この話になると土地の人たちは真剣な眼差しになり、義賊であつたとか、いやそうでなかつたとか、論争が行なわれていた。

マセイオ市から二五〇キロ離れた、サンターナ・ド・イバネーマ市まで、バスで四時間かかった。途中、パルメイラス・ド・インジオ市で小憩した時、トイレを借りたが、その汚ないこと筆舌に絶するものであつた。

この町と、サンタナ・ド・イバネマの中間を流れているイパネマ河は、河幅が三十米もあるが、水滴りが処々に散見され、旱魃の酷さを物語っていた。牧牛には乾季に強いパルマス（サボテンの一種）を栽培して、与えているとのことであつた。

セツカに強いアガローバという樹木があり、この樹だけが枯れ果てた山野に緑がくつきり目立った。

ピंगाで有名なアラピラーツカ市の周辺は、甘蔗畑が広々と続いており、アルコール製造工場があるが、周辺はその廃液の臭気が酷い。これを処理する方法はないものか。大都を離れた山奥まで汚染されている現状を見て、何となく末恐ろしい感を深くした。

飛行機は行きも帰りも満員で、伯国は借金国であっても、国民はゆとりがあるのだなあと感心した。

「日本旅情」

ブラジル日本都道府県入会連合会のご好意と、日本外務省、海外移住家族会のご招待により、私たちは、一九八六年十月十九日午後一時に、日本航空の飛行機で成田空港に着いた。

一九二九年十月十九日に、サントス港に入港した日から、恰度五十七年目の奇しくも同じ記念の日であった。

東京の第一銀座ホテルに旅装を解いた一行は、宮城、靖国神社、千鳥ヶ淵、国会議事堂、NHK、浅草、泉岳寺など見学して、そのあとは自分たちの故郷に帰ることになった。

私は故郷の熊本から出迎えてくれた従兄と共に、故郷の土を踏む前に、鎌倉、修善寺、京都に立ち寄ることにした。

東京から鎌倉まで「踊り子号」という電車に乗った。午後五時頃鎌倉に着いて、鎌倉旅館に泊った。

旅館の給仕をしていた女性がとてもよい人で、私たちを歓迎してくれたので、話がはずみ、夜中まで語り合い、靖国神社で頂いたお神酒をここで酌み交した。時化で、“木枯らし”が吹いていた晩の事を今も思い出す。

翌朝午前九時に旅館を出て「指月殿」源頼家卿の墓に詣でたあと、大仏の前で写真を撮り、鶴ガ岡の八幡宮へ参拝した。

一日中、鎌倉の名所旧蹟を見学する筈であったが、生憎の雨で、これを中止して修善寺に向かった。

桂川の流れを跨いで造られた旅館“菊屋”に入った時、その構造の素晴らしさに感歎した。“菊屋”の主は十四代目とかで、ブラジルから来たと言ったら特別扱いにしてくれ、温泉にも一人で入浴することが出来た。

翌日二十四日は、古都京都に遊んだ。三十三間堂、二条城の建築様式に目を奪われた。

鳩がよく人に馴ついていて、私の肩に止まった処を写真に撮って貰った。

東京から京都まで五日間が夢と過ぎた。

十月二十五日は、岡山の川柳“ますかつと”の主宰、大森風栄子先生の案内で、吉備津神社に詣で（三六〇米の歩廊が見事）、後楽園を散策して、名物の“きび団子”を買った。

本州の旅が一段落したので、二六日に愈々懐かしい故郷入り、その夜は十九名の従兄弟、姉妹が集まり歓迎会に臨んだ。

翌日は幼い頃住んでいた、日奈久町の温泉神社に参拝、鉄道線路近くの、昔の我が家の跡にたって、往時を偲んだ（元の家は跡形もなく駐車場になっていた）。ここでは、五十七年間文通をしていた西村夫人に再会した。夫君は半年前に死去）先祖の墓参と法要を済ませて二十八日に、“緑川”の鮎の養殖場を訪れ、生まれて初めてこの魚を試食した。（燻製は土産に持ち帰る）

十月三十日には谷干城が立て籠った熊本城と、水前寺を觀賞した。

翌三十一日には待望の阿蘇山へ登った。挺々と続く外輪山の雄大な眺めや、まだ煙を噴いている中岳を仰いで、昼食の弁当を使いながら大自然の美しきに見入った。

十一月三日天草に渡り、先ず天草パールの真珠に且を奪われた。天草四郎の遺蹟、キリスト教の寺院など珍しかった。ここでは曾て昭和天皇がお泊りになったという「望洋閣」で一夜を過ごした。

十一月四日、長崎の原爆記念館で被爆の惨状を目の辺りにして、その恐ろしさを知らされた。永井博士の家、グラバ邸、オランダ坂、平和記念像を訪れ、その後雲仙に渡り、お糸地獄では噴出する湯煙りで茹でた卵を賞味した。

十一月八日、熊本から川柳噴煙吟社主宰の、吉岡龍城先生が車で迎えに来られ、途中の“徳永”で鰻の蒲焼きをご馳走して下さった。

翌日、噴煙吟社の歓迎句会に出席、寄せ書きをして頂き、記念撮影、思い出多い句会となった。

十一月十四日、熊本空港まで見送りに来てくれた従兄たちと別れる時は、名残りを惜しみつつ涙の出るのを禁じ得なかった。

熊本空港から新大阪を経て、伊丹に行き義姉の家に泊した。一日暇が出来たので、観光バスで奈良に向

かった。ガイドさんの説明を聞きながら、春日大社、薬師寺、慈光院、法隆寺、唐招提寺など参観した。境内に飼ってある鹿がよく馴れていて、餌を手から幾つでもせがんで食べるのが面白い。鹿の数は一千育頭ぐらいいて、自動車に轢き殺されるのが、一年に何頭かいるとの話であった。

奈良で一番身に染みて感じたことは、三笠山を遠望した時で、安倍仲磨の“天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも”という望郷の歌を密かに口ずさんで古の歌人を偲んだ。その夜はブラジルで公演した、宝塚歌劇団のバレエを再び見ることが出来た。

入場料は二七〇〇円で満員、ブラジルの時が、初めてのことで数倍よかった感じであった。

約一カ月に亘る日本周遊の旅も終わった。

成田空港到着から最後まで、一生忘れることのない思い出を残してくれた従兄の暖かい心情に感謝してこの文を終わる。

一九九五・五・六記

「バラマンサ植民地時代の思い出」

九三年十月

プロミツソンの町から、西方十二キロメートルの地点に、バラマンサ植民地があった。

この植民地の面積は百六十五域（一域は二万四千二

百平方メートル）で、ほとんどコーヒー園であり、バラマンサ川の畔がパストになっており、牛や馬が放牧されていた。

私は、一九二九年十月末に、日本移民の一員として、父母や、叔父、兄妹六人が入植した。（妹一人は移民収容所にて病死）最初の二年は、光成松平氏の耕地に、コロノとして就働した。

植民地には、木村、光成、古庄、西山、藤崎、亀岡、中央、坂本、串閨、江良の諸氏が、十域から三十域の土地を所有しており、すべてコーヒー樹を何万本宛か植えて、コロノを四、五家族雇用してメザードとか、歩合で、二年から四年、六年の契約を結んでいた。

一九三〇年から、一九四〇年までが全盛期で、青年会の活動が目立った。

毎年新移民が入れ替り、一年か二年で転耕する人が多かった。

私たちは、一九二九年十月から、一九四三年八月まで約十四年間、ここで生活し色々な経験をした。

多感な少年時代を過ごした植民地の状況を回顧し、私の眼に映った出来ごとを記憶を辿りつつ書いてみる。二年間の契約を終えて、光成氏の耕地から坂本耕地へ四年契約で移った。三一年の末で、翌年はゼツリオ・バルガスの革命が起こり、植民地の有力者たちは、新しいカミニオンや、凡ゆる銃器類は徴発され、大恐慌を来たしたものである。

革命はご承知の通り、護憲を唱えるサンパウロ軍が、一敗地に塗れる結果となり、徹発されたものは何一つ戻らなかった。

飛行機が植民地の上空を翔んだのを見て、子供心に恐怖心を抱いたことを覚えている。

飛行機の爆音を聞いたのは、この時が生まれて初めてであった。

毎年七月には年中行事として、汎プロミツソン青年連盟主催の陸上競技大会が、移民の父、上塚周平翁の終焉の地である、ポンスセツソ競技場で行われていたが、一九三三年度の大会では、わがバラマンサが優勝の栄冠に輝いた。七チームから繰り出される応援団は、それぞれ派手な衣裳を着けて、終日、声が喧れるまで応援をしたものである。

この大会で大活躍をした選手は、山梨、芥川、古賀、光成、藤崎、田山などで、応援団長は藤本貫一氏（故人、後末原姓）であった。

優勝旗を持ち帰った時は、植民者総出の大歓迎を受けたことは勿論である。

移動の激しかった当時のこととて、翌年は、主戦力であった山梨、芥川などが移転して行ったパツチンニヨが優勝を飾った。

コレゴ・アズールの森本、パツチンニヨの玉置、カベセラ・ゴンザガの渡辺（通称ジガンテ）などの選手が輩出したのは、その翌年か、翌々年にかけてである。

バラマンサ植民地の地主の家には、独身でカマラーダとして働いていた人を多く見かけた。その中には仲々学識のある者がいて、パトロンの娘と結婚した人もいた。

年に一度の弁論大会が、バラマンサ小学校の講堂で開催されたことがあり、プロミツソン青年連盟の弁士たちが、各チームから二、三名宛選出されて熱弁を振るった後で、諸先生が感想を述べたが、その中にK氏が、「本日の大会の成績はゼロである」と喝破した。理由は開催時間が、一時間近く遅れたのを非難したのであった。

さあ、大変、S氏が直ちに登壇して、その行き過ぎを正したが、K氏は断乎として自説を曲げず、その時、プロミツソン連合日本入会会長、鈴木季遊民が中に入り、どうにか丸く収めた。

弁論大会で活躍した人たちは、伊津野、久米川、長瀬、坂本、諫山、難波、山本、末次（女性）、船辺、的野、黒田（家兄）など多士済々であった。

新移民の中には変り種がいて、一九三五年頃、福岡県出身の本岡氏一家が、わが家の近くに入植して来た。日本から自転車を持参して、乗り回しているのがとても珍しく、植民者の羨望の的であった。また、かるた（小倉百人一首）をコーヒー豆を収蔵する倉庫の中で、ランプや、カンテラの灯の下で取っていた。“かるたに興味を持っていた私は、夜中の二時頃まで一緒に取りな

がら、その妙技に見惚れていたものである。本岡一家は、バラマンサを二年ぐらいで引き揚げ、棉作のためチエテ移住地へ移転した。

無二の親友であった八郎、音三郎両君の誘いで、一度同地を訪れたことがあるが、マラリアの巢ともいいうべき所で、帰郷して十日ぐらい経った時に発熱して、コーヒー園の除草中眼が眩み、或る時は意識不明になりバツタリ倒れたことが一度あった。

恰度その年に、金伯少年陸上競技大会に、ノロエステ線の代表として出場したが、大会当日は寒気がして走り幅跳びの助走が足が重くて全然跳べなかつた。エスペリア倶楽部の競技場で撮った記念写真があるが、私だけ震えていたためボケで写っている。

スポーツは、陸上競技に熱中しており、校庭にある競技場で、走り幅飛び、三段跳、棒高跳など休憩時間を利用して、数人の級友と競争するのを楽しみにしていた。

ある日、肉屋のアントニオが来て、バーの高さを上げて、“これは跳びきらないだろう、跳びきったら一ミルやる” と言うので、全速力で走り見事にバーを越えた時は痛快であった。

当時の一ミルは肉一キロの値段であり、彼は約束通りこの金を払った。

その頃、何ヶ月に一度という程に日本のシネマがあつた。青年たちにとって唯一の慰安で、“女給” “さすらいの雨。青白き薔薇” “三家庭。魔の大都。陸の

王者”など見初めであり、プロミツソン町の映画館では、“滝の白糸。太平洋行進曲” “新しき土” “人妻椿” “愛染かつら”などを見に行つたのを懐かしく思い出す。

田舎の演芸会で、今も深く印象に残っているのは、奥ゴンザガの青年たちが演じた芝居“七化けお新”である。

一九四一年に半年に亘る闘病の末、四十八才の若さで父が亡くなった。

胃潰瘍であつた。

マラソンでも走破するような元気者であつたが、ピングの樽をすえて呑んでいたから、多分原因は酒であつたと思つている。

その年に太平洋戦争が始まり、植民地の様相は一変した。堂々とやっていた日本語教育が禁止された。

私たちは法網を潜つて隠れ学校を始めた。

本校からあまり遠くない、道路に面した倉庫で、児童を集めて夜学の授業中、監督たちが声高に話しながら通行しているのを察知した内海君（現希望の家事務局長）が、カンテラの灯を全部消して、難を逃れたことがあつた。

そんなことがあつて、授業は灯が外に洩れないように細心の注意を払つたものである。発覚すればブタ箱行きは必至で、よく気付かれずにやり通したと、今思つても身震いがする。

このような隠れ学校は、邦人植民地のあちらこちらで行われていたものと思われる。旅行するにもサルボ・コンヅットなしでは汽車に乗れなかった。

当局は邦字新聞の発行を停止した。ポ語のみで報道していた「ブラジル朝日新聞」も例外ではなかった。ラジオだけが日本の状況を知る唯一の報道機関となった。しかし、これも日本人の所有であれば没収された。

そこで、植民者は一計を案じて、坂本義弘氏二世（故人）の名義でラジオを購入する事を決定し、各自が三十ミルを醸金（当時一年分の邦字新聞購読料は六十ミル）してオランダ製のラジオを買った。四球（真空管）であったが、東京の大本営発表が手に取るようによく聴こえた。

内海君と二人で、この放送を聴取して清書して、毎日ニュースとして植民者に配った。

真夜中の三時の放送が特によく入り、寝ボケ眼をこすりながら二人でよく頑張った。

この仕事は一九四三年八月、私と内海君がグワラサイに転地するまで続いた。戦後バラマンサを訪れた時は、勝ち敗けの嵐が吹き捲っており、プロミツソンの邦人社会も二派に分かれ、対立の渦中にあった。青年連盟の理事長であった川俣氏（故人）がグワラサイの陋屋に来訪の際、時局問題について花が咲き、この事態は十年は続くであろう”と宣もうた事が、今も尚、耳底に

残っている。

「開墾地の出来事」

グワラサイ駅から七キロの地点にあるパラツシオ耕地の山焼きは、森林の伐採作業が連れて十月の末になつてしまつた。

既に何回か降雨があり、最後に伐採された地帯は伐り倒された大木はまだ生生しく、火は下の方を潜り抜けただけで、木はそのまま残つていた。入植者はこの木を片付けるのに、思いがけない労力を費した。

わが家では、七アルケールの耕作地を契約していたが、山が不焼けのため、小枝を伐り除る作業に追われて、初年度の作付面積は三域がやつとで、火が通つていない処は来年回しということになつた。

傾斜の酷い川（リオ・トラベツサ）の辺に米を蒔いたが、出穂期に、二十日間も早りが続いたために、殆ど絶望となり、稲の間作に棉を植えつけておいたのが、予想以上の出来栄で、急場を凌ぐことが出来た。

二年間そこで辛抱したあと、私たち一家はプラナルト駅から九キロの地点、モインニヨ耕地に土地を求めて入植した。

同植民地には、藤川、村上、佐藤、池上、井手、五十嵐、樽、諫山、堤本、北原、藤島、黒田の十二家族の邦人が、米、棉の栽培をしていた。植民者の子弟を集めて、

二年間夜学の巡回教師をしたことがあり、私の手書きで、“百人一首”を作り、同好者が面白く遊んだものである。

新山のうちは鍬一本で、萌え出る若芽を切り除る比較的簡単な作業であるが、三年目から草が生え始めるので、鍬だけでは間に合わず、鋤を入れることになり、横たわっている大木が馬耕の邪魔になるので、穴を掘って木を埋めるといふ、極めて原始的な方法で整地が行われていた。私は、二人の日雇い人夫にスコップで穴を掘らせ、その穴に挺子を使って木を落とし込む仕事をしていた。

ある日、直径一メートルもあるパウダアリオの倒木の際に、二人のカマラダが穴を掘り進んでいるのを観察していたら、一米余り掘った時、大木は徐ろに傾きかけた。驚いて、“ペリゴーズ（危ない）”と怒鳴ると同時に、穴の中にいた二人は猿のような早さで跳びあがった。正に“間髪を入れぬ”早業であった。それと同時に四、五米もある大木は穴の中へ落ちた。

この時、動作の鈍いものなら木の下敷きになっていたであろう。私達は天佑と神助に対し、ソプレビベウ（蘇生）を連呼して次の木を埋める作業に取りかかるのであった。

プラナルトの町には当時小松、横溝雜貨店と井上精米所、志水事務所などがあつて、農家の人たちは一週間に一度は、日常必需品の買い出しをしていた。

町から耕地までの九キロメートルは、バスも自動車もない時代で、主に馬を利用していた。

或る日、私は買物を馬に乗せて帰途についた。道の両側は原始林が残っており、猿や野兎などが棲んでいて、チウー（トカゲ）が道を横断するのを見かけた。道の半ばにさしかかった時、俄かにガサガサと枯葉をかき分ける獣の音を聞いたと思つた瞬間、馬はその音に驚いて一目散に駆け始めた。必死になつて手綱を引き締めても、たで髪を引っ張つても、止まるどころか原始林の一本道を脱兎の如く走つた。

植民地に入る曲がり角に来た時、馬はハタと止まつた。幸いに落馬することもなく家に辿り着いたが、いつふり落とされるか気が気ではなかつた。

その年は稲の出来栄えがよく豊作であつた。稲刈りは非常に忙がしいので、近隣の人の手の足りない時は手伝い、こちらにも来て貰い、所謂相互扶助で難関を切り抜けていたのである。

秋日和の続いた頃、刈り取つて乾いた稲を集めていた妹が、突然悲鳴をあげて稲束をほうり出したので、“

どうしたか”と訊いたら、稲束の中に蛇が昼寝をしていたのを見知らずに掻き集め、何か赤い紐のようなものが混じっていたので、よく見たら蛇であったという。直ぐ棒切れで叩き殺したが、それから用心をして、なかなか仕事が進まなくなった。

またある日の夕刻、母が井戸水を汲んで家の炊事場に運ぶ途中で、サツポ（蛙）のようなものを踏んだというので、ランプの灯でよく見ると、ジャララカ（毒蛇の一種）が急いで逃げてゆくところを一撃で殺した。母は顔の部分を踏んだと見え、噛まれずに済んだのである。それから夜、外へ出る時は必ずランプを下げて用心するようになった。

一九五〇年の夏、伐り残されたイツペの立木に落雷し、百米ぐらい離れた家の近くまで木片が飛来した事があった。雷の威力をまざまざと知らされた。また生まれて始めて皆既日蝕を見た。物凄い風が吹いて、昼なお暗き様相は今も忘れられない。その年には洪水でモインニョ川が氾濫して、上流に池が出来る程水位が上がった。どこから寄って来たのか、クリンバタ（鮒に似た魚）が群れをなして、水草をつついて見えた。家兄は一計を案じて棉を詰める風袋を五、六枚縫い合わせ、杭にくくりつけ、川幅の一番狭い処に堰をした。

減水するにしたがって魚は下流に下りる。この計画は効を奏して、逃げ場をなくした魚は、この綱ならぬ

サッコに突き当って跳ね上がり、見る見るうちに半サッコぐらいの大漁となり、久々に馳走にありつけた。あれから四四年、今も尚、私達兄弟の語り草になっている。

「馬」

九四・一一・二四

現在は機械化されて耕作も大型になったが、昔、私が百姓をしていた頃は、労力を馬におうところが多かった。

その日は朝から風が吹いていた。荷車にはバケツ代わりのラツタや、蒔きつけの種物を積んで馬具に鎖を繋ぎ、私は馬の後方に荷車の梶棒を握って出発した。積んでいたラツタが触れ合い音を立てた瞬間、馬はいつもとは違った勢いで駆け出した。梶棒を両手で支えながら、止めようとするが聞き入れず、村道を一目散に走ってゆく。馬の脚と人間の足では、どんなに大股に足を交わしても従って行けない。それでも、足が宙に浮いたら倒れる恐れがあるので、必死に梶棒にしがみついて、怒鳴りながら、何百米か走った時、この騒ぎを聞いて、道端に住んでいたイタリヤ人の娘さんが、馬の前にはだかり止めてくれた。お陰で大事に至らずに済んだ。また或る日のこと、馬耕中に空模様が悪くなってきたので、道具を片付けて家路に向かった。全速力で走り出

した裸馬に手綱を擦っているだけが精一ぱい。校庭の前に差しかけた時、学校帰りの生徒たちに出会い、馬が急に向きを変えたために私は弾みを喰らって地面にどうと落ちた。

戦時中、日本人の会合が禁止されていたので、ブラジルの国技フットボールを始めた時のことである。

隣村に遠征した折りに、一同馬で行くことになり、谷川のある道の急坂を、拍車をかけながら登る途中鞍の締め方が悪かったため、馬具もろともに馬の尻の方から落ちたことがある。この時は同僚のT君が鞍を締め直してくれ、蹴球場まで辛うじて辿りついたが、試合は六対〇という大敗を喫した。

私たちは二頭の馬を替わるがわる使っていたが、体格のよい方の馬がある晩、家の回りをぐるぐる廻っていたので、どうしたのかと不思議な思いで、翌朝になって馬を連れて来たがどうも元気がない。よく調べて見ると、右の前脚が腫れている。そこで毒蛇に絞まれた事が判り、急ぎ毒蛇の血清注射を射ってやったが恢復せず死んでしまった。その後が大変で大きな穴を掘って、これで馬の葬式が出来ると兄と二人で馬の脚に綱をかけて、穴の中へ引き摺り落とした。可成り深く掘ったつもりであったが、四本の馬の脚は天を向いていて、埋めようとしても土が足りない。如何に考えていても仕方がないので、掘り返すことも大仕事だから、四本の脚を斧で切り落として埋めた。

こんな後味の悪い経験はしたことがない。
春風秋雨四十五年、今でもこの馬のことを思い出し
て、冥福を祈っている私である。

「二葉あき子と対話の喜び」

四十何年か前に、幾多の流行歌を習い覚えた中に、今
もなお忘れがたいものに、「白蘭の歌」がある。

この度、当時の人気歌手であった、二葉あき子さんが
来伯された。むかしのファンたちが、なつかしい歌声を
聴きに、文化協会の講堂に集まった。

コンサートの始まる前、三月十一日午前十時半頃、
ひよっこり、ただおひとりで、二葉さんが私のボックス
の前を通りかかられた。

いつもなら取り巻きの人々がいて、挨拶どころでは
ないのだが、おひとりという気易さで、思わずお手を握
り、昭和十四、五年頃の歌の話をする事が出来た。「自
蘭の歌」が好きであったことを申し上げたら、直ちに相
棒の歌手であった伊藤久男さんが亡くなられたことを
しみじみと語られた。

わずか、二、三分間の会話であったが、この時二葉さ
んの温情にふれた思いがした。

その前日訪問された「憩の園」では老人たちに、殊
の外やさしく応対され、励まされたと洩れ承っている。
私は四十何年も前に愛唱した歌の数々が想い出され、

なつかしきのみあげてくるのを覚えた。これはあとにも先にも、めぐり合うことのない一期一会の思い出となつて、生涯忘れることの出来ない貴重な時間であつた。

日毎社にこの種の催しを毎年やつてもらい、あと幾許もない移民たちの余生を潤して頂きたい。

二葉さんはこれが唄い納めだと言つておられたが、どうかお健やかに、長寿を全うされることを祈るものである。

八四・四・二

「ぶらじる川柳の集大成」

第四十回全伯川柳大会を記念して、句集「柳筏」が刊行された。

ブラジル在住一八二名の柳人の作品が一九一頁に亘り掲載されており、正に“ぶらじる川柳”の集大成ともいえるものである。

この句集は、ぶらじる川柳社主幹の瀬古義信氏が、半間に亘り、心血をそそいで完成されたもので、その内容は、一人二十句が収録されており、住所、姓名、年齢、渡伯年月日、郵便番号が記述されているから、柳人たちの交流という点についても、よく考慮されたとても便利な句集である。句集の作成に当って、ワープロ、印刷、校正、編集、製本、発送と、全て一人の力で成し遂げられた主幹の献身的努力に対してただただ頭の下がる思

いがする。

全ブラジルの柳人が真剣に取り組んで、作句、選句したあとがよく判り、並々ならぬ意欲が全巻に湛っている。ブラジルの川柳が、よくこれまで漕ぎつけたという感を深くする。

恐らく空前絶後と思える“全伯川柳作家自選一ペー
ジ句集討刊行の壮挙に対し、心から慶賀の意を表する
ものである。”

「犬と猫と鶏」

(プロミツソンのバラマンサでの出来事)

ポチ は毛色が白く、生まれた時からわが家で可愛
がって育てていた。発育盛りになると、毎日鶏を追い回
すようになり、若鶏を傷つけたり、半殺しにするようにな
った。いくら止めても肯かないので、父は思い余って
ポチ を殺すと育て、庭の蜜柑の木に締めつけ、鋏
で一撃を食らわせた。“ポチは悲鳴をあげて倒れ、ぐつ
たりなったので死んだのだと思っていたら、頭をもた
げて怯えているではないか、ここで父は慈悲心を起こ
して縄を解き放してやった。”

私たちが介抱した甲斐があつて、幾日か経ったら元
気を取り戻した。それから鶏を見ると避けて通るよ
うになり、いくらけしかけても鶏を追うことはしなく
なった。

（次は、プラナルトでの話）「猛犬ナチ」

隣家の人が移転する時、犬は連れて行かないというので、私の家に引き取って養うことにした。とても体格のよい猛犬で、家の前を通る人によく吠えた。ブラジル人たちは恐れて二、三〇メートルも迂回して、棉畑の中を通行するようになった。それまではよかったが、“自分は、お前が飼っている犬に噛まれた”という者が出て来て、「犬を今のまま放置しておく、何か手段を取る」と凄い剣幕で怒鳴りこんで来た。

熟考の末、私たちは涙を呑んで“ナチ”を毒殺した。次は猫の話。今から二五年前、商売をしていた頃、猫を一匹飼っていた。黒の斑のメスで、鼠をよく捕っていた。或る日、店内に入り込んだ鼠を捕るのに猫を連れて来て、指図をすると同時に鼠に飛びかかったのはよいが、ビールや、グワラナや、ビナグレの瓶の並んでいる棚の中に突進して行ったからたまらない（鼠一匹捕えるのに大騒動の末、大損害を被ったことがある。

この猫が井戸端で日向はこをしているのを隣家の悪童が手懐けて、こともあろうに深さ十二米ある井戸の中へ放りこんでしまった。

「さあ、大変」店頭にあったペネイラに縄をかけて、井戸の水面まで下ろすと、“ニヤオン”“ニヤオン”と鳴いていた猫は素早くペネイラの縁に掴まり、ゆっくりと私が井戸端まで引き上げるのを待って

いた。

鶏のことは一度“パウリスタ新聞”に書いたことがある。

キンタールに鶏小屋を作って一つがいの鶏を飼っていた。その鶏が卵を孵化し大事に育てているうちに二十羽ぐらいになった。

毎日のように卵や、鶏料理も食べられるようになった。牝鶏の中には卵を孵化する時に、羽の下の卵を温めるのに細心の注意を払うのと、ぞんざいなのがいて、鶏によつて卵を半分ぐらい腐らせるのがいた。

その中に烏帽子があり、最古参の婆鶏は一ダースの卵を抱かせると、殆ど全部を孵した。雛にもよく気を配り、誤つてヒヨコを踏んだりはしなかった。鶏小屋は手狭になり、サンパウロの友人にもナタールのプレゼントに送ったものである。そんなに増えてゆく鶏の群に浸つて喜んでいた矢先、雛を連れた親鶏が急に元気をなくして雛を呼ぶことも、餌を啄むこともせず一両日のうちに死んでしまった。

これをきっかけに大恐慌が起こり、とても強かった牡鶏も口から泡を噴いて倒れ、此処彼処に鶏の死骸で、これを葬るのに心が痛んだ。

病気は養鶏家の強敵ニューカッスルであり、どのような方法を以てしても、これを食い止めることは出来なかつた。

あれから四半世紀、熱病の犠牲になった鶏たちのこ

とを時々思い出している。

一九九六・七・一

「悪夢に憑かれた戦後の混乱」

その時、二十数家族の植民者の中で、ラジオ・ニュースを聴いている人は殆どなく、日本が戦争に勝ったか、敗れたか皆目わからない人が多く、ニュースをそのまま伝えでも神州不滅、皇国不敗を徹底的に叩きこまれた日本人たちには、納得のいかない事であった。

マニラが敵手に陥ち、硫黄島、沖繩が相次いで玉砕し、平静な眼で見れば日本の敗勢は明らかであったが、緒戦の勝利とその強さを見せつけられた者には、まだ連合艦隊がどこかの島影に潜んでいて、最後の勝利はわが方にありと、大本營の誇大宣伝などに眩惑されて、希望的観測に汲々として全く視野が利かなくなっていた。

正邪善意の見定めつかない自由意志をなくしたとも思われる四圀の同胞の中で、私が真の日本の姿を語り合えるのは、当時ラジオを聴かせてくれたK氏と、家兄ぐらいのものであった。

たまたま、商用で小家を訪れたK氏は、日本人の狂態を次のように語った。

“日本連合艦隊がリオへ入港するというニュースを信じて、何十人かの邦人が、腹に日の丸を巻いてリオ港に

行き、×月×日に待機したが、待てど暮らせど艦は現われず引き返した。南洋に再移住が決まったので、土地や家財を整理して引き揚げ船を待っている。事情の判っているものにとっては、阿呆らしい事だが、それらの人たちは真剣にその事を考えていた。

「このような時代錯誤は、ここ十年間はずぶくものと見てよい。自分が一番懸念しているのは、同胞同志

が血を流すような事件の発生することである」

この予言は現実となり、あちらこちらで惨劇が繰り返された。

私は終戦後、日本の従兄と文通を始めた。従兄から来た手紙には、南方に派遣されて九死に一生を得て帰還したこと、物資不足の日本の窮状を訴えたものであったが、この手紙はカラクリであるとして、植民地の指導者から顧みられなかった。人は一つのことを思いつめたら手の施しようもなく頑迷になる。

而し、どのような厄介な問題でも、時の流れは解決してくれるもので、相剋に明け、相剋に暮れ、悪夢に憑かれたような戦後の動乱も、四十一年前の物語りとなった。

一九八六・八・二三

あとがき

戦時中、一九四四年二月、植民地の機関誌に、「責任のなすり合いする不焼山」という川柳を発表、この句は弊害があるからと、日本人会長T氏が墨で塗り潰した。一九四九年「日伯柳壇」が創設され、活字に飢えていたことも加わり、川柳作句に夢中になっていた。

ここに集録したのは「日伯柳壇」「パウリスタ柳壇」「新生吟社月報」「コロニア詩歌」「詩文学」「ぶらじる川柳」「噴煙」「能因」誌等から抜粋したものである。随筆は、コロニアの三新聞に五〇回ぐらい投稿したが、手許に保管してあるのは三三篇で、あとは心残りもあつたが割愛した。

ブラジル生活六七年の軌跡を残すことが出来たのは、四人の子供たちの理解ある支援の賜物である。

著者略歴

出身地

熊本県八代郡和鹿島村中網道（現竜北町）

一九二四年一月二一日生

渡 伯 一九二九年一月一九日（河内丸）

川柳入門 一九四九年 堀田栄光花師

現住所

ブラジル国 サンパウロ市

イタチアエア街五二番アパート二二号

〒〇四三一〇一〇一〇

電話Ⅱ（〇一一） 五五八九一五三四四

砂漠の河

発行 一九九六年一〇月一九日

著者 黒田真徳（柳名不知火）

印刷 トツパン・プレス印刷出版有限公司